学位論文要旨

音楽教育における移民の背景をもつ子どもの社会的包摂
－ケイパビリティ・アプローチを視点とする質的研究－

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　教科教育学分野
音楽文化教育学領域

D162008　Josep Ferran Galicia
（フェラン　ガリシア　ジュゼプ）

論文題目

音楽教育における移民の背景をもつ子どもの社会的包摂

－ケイパビリティ・アプローチを視点とする質的研究－

論文目次

序　章

第 1 節　研究の背景

第 2 節　研究の目的と設問

第 3 節　研究デザイン

（1）方法論

（2）研究の対象 ―「子どもが育つ音楽教育」プロジェクト

（3）データ収集

（4）研究者の視点

（5）研究の意義と限界

（6）用語の定義

第 I 部　社会的包摂とケイパビリティ・アプローチを中心とする理論的枠組み

第 1 章　社会的排除と包摂

第 1 節　本論における社会的排除と包摂の位置づけ

第 2 節　伝統的な社会正義論

第 3 節　ジョン・ロールズと社会正義

（1）古典的な社会契約説の再興

（2）功利主義への批判

（3）ポスト・ロールズの正義論の拡大

第 4 節　グローバル化と社会的排除

第 2 章　ケイパビリティ・アプローチ

第 1 節　概念の小史と M. C.ヌスバウムと A.センの立場の違い

第 2 節　ケイパビリティと機能，尊厳，自由

（1）機能

（2）尊厳

（3）自由

第 3 節　　ヌスバウムの 3 つのケイパビリティ

第 4 節　　国境を越えた正義

第 3 章　ケイパビリティ・アプローチの教育への適用
第 1 節　本質的価値と自由を取り巻く状況
第 2 節　コンピテンシーとケイパビリティ
（1）「ジオ・ケイパビリティズ」プロジェクト
（2）力強い学問的知識（Powerful Disciplinary Knowledge）
第 3 節　障碍者のインクルーシブ教育とケイパビリティ
第 4 章　音楽教育におけるケイパビリティ・アプローチに関する先行研究
第 1 節　音楽教育における自由の保障と拡張
第 2 節　コンピテンシー重視の教育に対するケイパビリティの考え方と音楽教育への応用
第 3 節　社会正義の観点から音楽教育が貢献できること

第Ⅱ部　音楽教育実践における社会的包摂の質的分析
第 5 章「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトの特徴
第 1 節　分析の対象と方法
第 2 節　カリキュラムの分析結果
（1）カリキュラムの特色
（2）教育目的
第 3 節　授業実践の分析結果
第 4 節　カリキュラムと授業実践の分析にもとづく「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトの特徴
第 6 章　「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトにおける移民の背景をもつ子どものエスノグラフィー
第 1 節　分析の対象と方法
第 2 節　学習の身体化
第 3 節　秩序と寛容性の境界線
第 4 節　子どもの社会的・文化的特性
第 5 節　集団的創造性とその背景にある他者との関わり
（1）学習の形態
（2）他者との関わり
（3）子どもの知性の多様性と音楽の多様性を結びつけようとする教育観
第 7 章　ケイパビリティを視点とした音楽教育における移民の背景をもつ子どもの社会的包摂

第 1 節　本章の目的
第 2 節　尊厳
第 3 節　自由

結　章
第 1 節　総括
第 2 節　研究の設問への回答
第 3 節　研究の限界，意義と今後の課題

謝辞
引用・参考文献

論文要旨

序章

移民の背景をもつ子どもを包摂することのできる音楽教育とはどのようなものなのか。教育者は何に配慮すべきなのか。日本を含む多くの国・地域がかつてないほどの移民や難民の受け入れを経験しており，教育現場では早急な対応が求められている。OECD（2017, p.31）はこれらの状況を踏まえ，統合政策の強化に向けた取り組みとして，教育のイノベーションと実験的試みを支援することを対策として挙げている。

これらの教育イノベーションは, 社会格差や貧困による教育機会の不平等に対する方策の成功例であるが, 人びとが社会から孤立してしまう社会的排除の問題とその解決を目的とする社会的包摂と深い結びつきがある。近年の社会的排除と包摂の議論に大きな影響を与えたものに，アマルティア・セン（A. Sen）とマーサ・C・ヌスバウム（M. C. Nussbaum）の共同研究の産物「ケイパビリティ・アプローチ」がある。社会正義の観念を基盤とするケイパビリティ・アプローチは,「人びとはなにができ（do)，なにになることができるのか（being)」をその中核的な関心事として据えており（Nussbaum, 2011），社会的に排除された人びとに最低限の所得を提供することは貧困問題の解決の一手段として有効かもしれないが，より根本的な問題である排除は克服されないことを問題視し，排除された人びとに事後的な補償を提供するのではなく，その代わりに，よりいっそう包摂的な社会を構築することをねらいとしている（バラ　&　ラペール, 2005, pp.32-35）。

ケイパビリティの概念は, 経済学や哲学思想を出発点としながらも, 教育学（Saito, 2003; 馬上, 2006, 2009），教科教育学（Biddulph et al., 2020; 志村, 2021），障碍者のインクルーシブ教育（Norwich, 2014; 荒川, 2014）などの各領域の間でもその適用について議論がなさ

れてきたが，音楽教育の研究領域において，移民の背景をもつ子どもの社会的包摂についてケイパビリティ・アプローチの立場から検討している研究はこれまでにない。また，広義のインクルーシブ教育や社会的包摂を目指した音楽教育について，近年，実証科学の立場から音楽教育が人間の発達に及ぼす影響を測定しようとする転移効果研究が盛んに行われ，社会的に不利な状況下におかれた子どもへの効果についても議論がされてきた（Catterall et al., 2012; Deasy, 2002; Fitzpatrick, 2006; Krupp-Schleußner & Lehmann-Wermser, 2018; Zapata & Hargreaves, 2018）。一方で，多文化的環境におかれた音楽教育者にとって科学的根拠にもとづいた音楽の影響力を知ることは欠かせない事柄であるが，どのような哲学的基盤や教育観，方法論を用いて，日々の教育活動に取り組むべきなのかという側面にも目を向けなければならない。

以上の，先行研究の検討に加え，筆者がこれらの問題意識をもつ契機となった重要な出来事は，カタルーニャ州立ペラアントン幼小一貫校（スペイン）の「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトとの出会いである。筆者は，2018 年から 2019 年の 1 年半の期間，本校で長期密着型フィールドワークを行ったが，これまでの音楽教育における研究動向や多文化的な教育現場が抱えるさまざまな課題に関する先行研究の検討をとおして，音楽教育による社会的なインパクトの背景にある日々の授業ではなにがなされているのか，またそれと移民の背景をもつ子どもの社会的包摂とにはどのような関連性があるのかについて考察する必要性が生まれた。

そこで，本研究の目的は，カタルーニャ州立ペラアントン幼小一貫校の「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトを対象に，ケイパビリティ・アプローチを視点とするエスノグラフィーを行うことによって，移民の背景をもつ子どもを交えた音楽活動における社会的包摂とはどのようなものなのか，音楽教育実践の状況と教育者の教育観の側面から明らかにすることである。

続いて，研究の目的を明らかにするために，下記の研究の設問を設けた。

研究の設問

ケイパビリティ・アプローチの視点から，音楽教育実践における社会的包摂とはどのようなものなのか

1. 音楽教育実践のどのような状況が，移民の背景をもつ子どもの尊厳と自由を保障しているといえるのか
2. 教師の教育観と移民の背景をもつ子どもの尊厳と自由の保障はどのように関わ

っているのか

研究の方法論は，音楽教育における移民の背景をもつ子どもの社会的包摂とはどのようなものかを，多角的かつ重層的に検討しようとする立場をとることから質的研究の手法を採用した。質的研究の方法論のなかには，さまざまなアプローチがあり，研究者がそのなかから研究の問いを明らかにするために適当な方法論を選ぶことが求められている（サトウ，2019）。本研究では，研究の問いに答えるために 2 つの異なる質的アプローチ，すなわちケーススタディ（第 5 章）とエスノグラフィー（第 6 章）を「質的」な混合研究法（Morse, 2009, 2010）の立場から相補的に用いた。

本論の構成は，次のとおりである。序章で研究の背景とデザインについて述べ，第 1 章から第 4 章では，社会的排除と包摂の概念，ケイパビリティ・アプローチの理論，そしてケイパビリティ概念の教育および音楽教育への適用について論じ，分析に用いる理論的枠組みの確立を図る。第 5 章では，「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトの特徴をケーススタディによって定義づけ，第 6 章では移民の背景をもつ子どもの経験と教師の教育観に焦点をあて，エスノグラフィックな方法によってさまざまな事例の社会文化的な解釈を行う。第 7 章では，第 1 章から第 4 章で検討した理論的な知見と，第 5 章および第 6 章の質的分析の結果を照らし合わせ，ケイパビリティ・アプローチの視点から移民の背景をもつ子どもの社会的包摂について考察する。最後に，結章では，研究の設問に回答し，本研究の限界および今後の課題について述べる。

第 I 部　社会的包摂とケイパビリティ・アプローチを中心とする理論的枠組み

第 1 章から第 4 章では，社会的正義に関する近代の哲学的思想を概観したうえで，ケイパビリティ・アプローチの諸概念について整理し，教育におけるケイパビリティ・アプローチの適用についてのさまざまな議論に目を向け，社会的排除と包摂についての理論的枠組みを構築した。

理論的枠組みの構築では，次のような事柄が明らかになった。第 1 に，人間の「尊厳」については，社会契約説の自然状態や，ヌスバウムの基礎的ケイパビリティのような哲学的な基本原則が存在し，ケイパビリティ・アプローチはその尊厳を保障するために，ヌスバウムの 3 つのケイパビリティの理論にみられるように，より実践的なアプローチを提示していることが明らかになった。第 2 に，人間の「自由」は人間の「尊厳」と関連する形で，他者を尊重することによって保障されることや，「自由」を促進するためには他者の権原を侵害しない一定の制約が必要であることが明らかになった。

次に教育におけるケイパビリティ・アプローチの適用については，子どもにとって機能

の獲得が目標とされる一方で，本質的価値と自由の観点から，発達段階にある子どもの尊厳と自由をどの程度保障することができるのかという問いが生成された。音楽教育の文脈においても類似する問題があらわれ，子どもの生涯にわたる豊かな音楽活動を保障するためには，教育段階においてどのような音楽的機能の獲得が保障されるべきなのかが重要であることが明らかになった。

第Ⅱ部　音楽教育実践における社会的包摂の質的分析

第 5 章では，ペラアントン幼小一貫校の「子どもの育つ音楽教育」プロジェクトの特徴をカリキュラムおよび授業実践の分析から明らかにした。具体的には，①音楽を枢軸とする教科横断型の学習と，汎用的なスキル・コンピテンシーの習得が推進されていること，②音楽の学習は幼児期から児童期にかけて段階的に発展し，体験的・直観的で感受性を高めることが基盤となっていること，③音楽教育をとおして子どもの学習機会や尊厳の保障，連帯の促進や社会的排除を撲滅しようとする，などの教育目標や方法，授業実践の特色が

表 1　生成されたカテゴリーと上位コード

カテゴリー	上位コード
【学習環境の工夫】	［教室空間］ ［学習形態］ ［芸術性の高い空間］
【非言語的コミュニケーション】	［音楽によるコミュニケーション］ ［身体動作によるコミュニケーション］
【模倣】	［模倣の動機付け（遊び，題材）］ ［視覚による音楽の諸要素の知覚］
【静寂】	［音に意識を向ける］ ［好奇心の誘発］
【子ども主体の表現】	［即興的な表現］ ［創作］
【学際的アプローチ】	［自然］ ［テクスチャ（触覚，視覚）］
【複合芸術アプローチ】	［音型，フレーズと視覚教材］ ［身身体の動きと音楽の感受］ ［音楽，美術，身体表現］

あることが明らかになった。また，質的コーディングの分析方法によりペラアントン校の授業実践の特徴を表すものとして，カテゴリーと上位コードが生成された（表 1)。

第 6 章では，移民の背景をもつ子どもの経験を，音楽教育実践の状況と教師の教育観の観点から，エスノグラフィーの手法によって描写し，社会文化的パターンを明らかにした。以下は生成された 4 つの社会文化的パターンである。

1. 学習の身体化
2. 秩序と寛容性の境界線
3. 子どもの社会的・文化的特性
4. 集団的創造性とその背景にある他者との関わり

第 7 章では，第 5 章で明らかになった「子どもの育つ音楽教育」プロジェクトの特徴と第 6 章で明らかになった社会文化的パターンを，ケイパビリティ・アプローチを中心とする理論的枠組みと照合し，移民の背景をもつ子どもの経験を「尊厳」と「自由」の観点から 4 つの命題を用いて理論的に解釈し，考察した。以下に 4 つの命題を示す。

〈移民の背景をもつ子どもの尊厳の保障に関する命題〉

命題 1： 音楽教育実践における芸術的シンボルは，一定の学習環境が整えられ，適切な方法論が用いられたとき，学習の身体化をとおして，移民の背景をもつ子どもの認知的・情動的次元に作用する

命題 2： 命題 1 は，教師と子ども，あるいは子ども同士が相互的に他者を尊重できる学習空間が築かれたときに促進される

〈移民の背景をもつ子どもの自由の保障に関する命題〉

命題 1： 移民の背景をもつ子どもの自由は，集団的創造性とその背景にある他者との関わりにおいて具現化する

命題 2： 機能の獲得には個人差があるが，音楽の多様性を認識する教育観が，子どもの自由を保障するうえで鍵となる

ケイパビリティ・アプローチからみた移民の背景をもつ子どもの「尊厳」は，人と人の芸術的シンボルによる相互行為によって表出され，個々の学習への作用と他者の尊重

という側面から保障されること，移民の背景をもつ子どもの「自由」は，集団的創造性とその背景にある他者との関わりにおいて具現化し，また，音楽の多様性を認識する教育観が，子どもの自由を保障するための足掛かりとなることが示唆された。

結章

本研究で明らかになった重要なことの 1 つは，音楽教育実践における芸術的シンボルの相互行為が，移民の背景をもつ子どもに認知的・情動的な作用をもたらすことであり，それが学習の身体化によって説明されることである。そして，芸術的シンボルが，適切な学習環境や方法論によって子どもの学習集団に解き放たれるということは，他者を尊重するということと深くつながっていることが示唆された。他者の尊重は，つまり，子どもの社会的・文化的特性や知性の多様性を理解し，それを学習のダイナミズムのなかに包摂することにほかならないのであり，それは，芸術的シンボルの相互行為によって具体化する。ヌスバウムは，尊厳という概念は単独で扱うことができないと主張したが，音楽教育における尊厳は，まさにこのような芸術的シンボルを中心とする有機的な学習の構造のなかに見出されるのであって，尊厳が哲学的な基盤を出発点としながらもより実践的なものとして捉えうることを意味している。

このような，芸術的シンボルの相互行為における教師の役割は本質的なものであり，ペラアントン校の教師たちの教育観や授業内の教育的行為にみられるように，教師たちは学習集団のなかで多文化共生を先導し，実現するキーパーソンである。しかし，それと同時に，集団的創造性の概念にみられるように，教師が学習空間にまく芸術的シンボルの種は，即興や創作などの活動によって複層的に飛び交い，子どもの社会的・文化的特性や知性の多様性を具現化させる役割をもつと考えられる。また，集団的創造性によって子どもの特性が尊重され，集団のなかに有機的な相互作用が生まれるとき「自由」が保障される。

したがって，音楽教育実践における移民の背景をもつ子どもの「尊厳」と「自由」は，このように，音楽特有の芸術的シンボルが他者を尊重するものとして用いられたときに，保障されると考えることができる。

教師は，長期的な教育目標や子どもの将来に対するヴィジョンを明確にもった状態で日々の教育活動に従事しており，それは，ケイパビリティの概念にみられるような本質的価値であるといえる。そして，『秩序と寛容性の境界線』の社会文化的パターンみられるように，教師たちは，どの程度子どもの自由を保障するべきなのかについて日々試行錯誤している。例えば，生涯にわたって音楽を愛好するための素養を身につけることが本質的価値であるのであれば，学習の身体化をとおして，音楽的な知識・技能を獲得することが

重要となる。これは，ケイパビリティの機能の獲得と類似する考え方であるが，一方で子どもの機能の獲得はその社会的・文化的特性の多様性を要因に個人差があり，獲得がより成功する場合とそうでない場合がある。教師は，このような不確実性のなかで葛藤を感じることがある。しかし，それと同時に，音楽の多様性を認識することは，子どもの社会的・文化的特性の多様性を受容することにつながるのであり，より包摂的な教育的環境を構築するうえで鍵となるということが示唆された。また，教育者が子ども自身の自由を，子どもがさまざまな機能を組み合わせ，それらを自由に選択することができるように学習を促す目線で，つまり積極的自由の立場から捉えることが，移民の背景をもつ子どもの社会的包摂において重要な観点であることが示唆される。

本研究では，社会的排除と包摂という社会集団の全体を取り巻く問題について取り上げたが，そのなかでも，特に移民の背景をもつ子どもの経験に焦点をあてた。一方で，エスノグラフィーを行った現場には，スペインにルーツのある幼児・児童（移民の背景をもたない子ども）も存在しており，社会的排除と包摂を，さまざまな社会的・文化的特性をもつ子どもの包括的な視点から読み取ることにはいたらなかった。

これらの限界のなかで，本研究は，移民の背景をもつ子どもが一極集中したことで始まったペラアントン校の音楽教育プロジェクトについて，研究対象者である子どもと教師たちが日々の授業や学校生活で，どのように自己と他者の尊厳と自由を尊重しているのか，またその際にどのような課題が生じているのか，音楽教育のどのような側面がそれをもたらしているのかという問いに答えようとした。これらをとおして，各国の教育現場で移民の背景をもつ子どもが増加し，教育現場が多文化化する今日の状況において，音楽教師や教育関係者がどのように教育活動を展開していくのかという問題に新たな実践的知見や視座をもたらすことができたと考える。

今後，「子どもが育つ音楽教育」プロジェクトの特徴として挙げられた芸術的シンボルを用いた学習活動が，どのような足場かけや学習の拡張のうえで成り立っているのか，それは音楽教育特有のケイパビリティによって説明されうるのか，また，集団的創造性にみられるような即興や創作などの学習内容が，社会的排除と包摂や，人間の幸福の追求とどのように関連しているのかについて，子どもの学習の場において探究することが望まれる。

引用・参考文献

荒川智 (2014)「ケイパビリティ・アプローチとインクルーシブ教育―M. ヌスバウムの提起をめぐって―」『茨城大学教育学部紀要（教育総合）』増刊号, 265-281.

バラ, A. S., ラペール, F. /福原宏幸, 中村健吾監訳 (2005) 『グローバル化と社会的排除―貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂. (Bhalla, A. S. & Lapeyre, F. (2004). *Poverty and exclusion in a global world* (2nd ed). Macmillan Publishers.)

Biddulph, M., Bèneker, T., Mitchell, D., Hanus, M., Leininger-Frézal, C., Zwartjes, L., & Donert, K. (2020). Teaching powerful geographical knowledge – a matter of social justice: Initial findings from the GeoCapabilities 3 project. *International Research in Geographical and Environmental Education*, 29(3), 260-274.

Catterall, J. S., Dumais, S. A., & Hampden-Thompson, G. (2012). *The arts and achievement in at-risk youth: Findings from four longitudinal studies*. https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED530822.pdf

Deasy, R. J. (Ed.). (2002). *Critical links: Learning in the arts and student academic and social development.* Arts Education Partnership. https://www.aep-arts.org/wp-content/uploads/Critical-Links_-Learning-in-Arts-and-Student-Academic-and-Social-Development.pdf

Fitzpatrick, K. R. (2006). The effect of instrumental music participation and socioeconomic status on Ohio fourth-, sixth-, and ninth-grade proficiency test performance. *Journal of Research in Music Education*, 54(1), 73-84.

Krupp-Schleußner, V., & Lehmann-Wermser, A. (2018). An instrument for every child: A study on long-term effects of extended music education in German primary schools. *Music Education Research,* 20(1), 44-58.

Morse, J. M. (2009). Mixing qualitative methods. *Qualitative Health Research*, 19(11), 1523-1524.

Morse, J. M. (2010). Simultaneous and sequential qualitative mixed method designs. *Qualitative Inquiry*, 16(6), 483-491.

Norwich, B. (2014). How does the capability approach address current issues in special educational needs, disability and inclusive education field? *Journal of Research in Special Educational Needs*, 14(1), 16-21.

OECD 編著/布川あゆみほか訳 (2017)『移民の子どもと学校―統合を支える教育政策』明石書店. (OECD (2015). *Immigrant students at school: Easing the journey towards*

integration. OECD Reviews of Migrant Education, OECD Publishing.)

Saito, M. (2003). Amartya Sen's capability approach to education: A critical exploration. *Journal of Philosophy of Education*, 37(1), 17-33.

サトウタツヤ (2019)『質的研究法マッピング　特徴をつかみ，活用するために』新曜社.

志村喬編著 (2021)『社会科教育へのケイパビリティ・アプローチ―知識，カリキュラム，教員養成―』風間書房.

馬上美知 (2006)「ケイパビリティ・アプローチの可能性と課題―格差問題への新たな視点の検討として―」『教育学研究』73(4), 420-430.

馬上美知 (2009)「ケイパビリティ・アプローチにおける『自由』および『平等』の概念について―教育における公共性概念の再考のために―」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室　研究室紀要』35, 23-31.

Zapata, G. P., & Hargreaves, D. J. (2018). The effects of musical activities on the self-esteem of displaced children in Colombia. *Psychology of Music*, 46(4), 540-550.